

宮沢賢治と矢巾町

「銀河鉄道の夜」の舞台は南昌山

第8回

宮沢賢治と矢巾町のかかわりを紹介するこのコーナー。今回は賢治が親友である藤原健次郎（白沢出身）との思い出などを題材として書いた三つの童話を紹介します（あらすじと解説は「矢巾町宮沢賢治を語る会」の松本隆会長によるものです）。なお、作中の「私」が賢治、「藤原慶次郎」が健次郎と考えられます。

※3作品とも「新修 宮沢賢治全集第9巻 童話2」（筑摩書房 1979年刊）に所収

① 鳥をとるやなぎ

【あらすじ】

尋常小学校4年生のころ、私は藤原慶次郎に誘われて、鳥を吸い込むという「エレキの楊の木」を探しに煙山へ出かけた。

煙山の野原から川に出て、上流に向かうと楊の木があった。間もなくして風が吹くと、楊の木が揺れて葉がブリキの様にピカピカと光り、百舌（ここではムクドリを指すと思われる）の一群が磁石に吸い込まれるように楊の木に飛び込んでいった。慶次郎が石を木に投げてみると、群れは再び飛び上がり、隣の楊の木に飛び込んだ。

繰り返し見ていくうちに、この場所に鳥を吸う楊の木があるとは思

わなくなつたが、全くないとも思えず、気持ちが悪くなつた。

私は今でも、楊の木には鳥を吸い込む力があると思えて仕方がない。

【解説】

作中で「煙山」「南昌山（南昌山）」「毒ヶ森」などの地名がそのまま使われています。また、道中の描写については、当時健次郎と南昌山に向かつて歩いた風景を回想して書いたものと思われ



詩碑周辺の楊林（現在は流失）

の場所、現在の水辺の里（賢治詩碑がある場所）付近と考えられ、実際にこの場所に楊の木がありました。平成25年8月の大雨災害で流失し、現在は見る事ができません。

② 谷

【あらすじ】

尋常小学校3年生か4年生のころ、私は馬番の理助と「檜渡」にキノコ採りに行った。檜渡は非常に危険な場所で、理助は私にこの場所に

一人では来ないように言った。

翌年に理助が北海道に行つてしまひ、一人で行くのは怖かつたので、私は藤原慶次郎を誘つてこの場所に向かつた。二人で山を歩いているとキノコがたくさん生えている場所に出た。私は新しい場所を見つけたと思ひ、慶次郎とキノコをたくさん採つた。採つた後、崖を見ると去年と同じ場所だつたのでがっかりした。

二人で崖に向かつて叫ぶと、こたまが返つてたが、まるで崖が何かをつぶやいているように聞こえて怖くなり、逃げるように山を下りた。

【解説】

作中の「檜渡」は、南昌山の五合目から稜線を南に約2km進んだ場所にある「馬の背渡り」「ヘッタクレ」と呼ばれる場所をモデルにした地名と考えられます。「馬の背渡り」は非常に危険な場所で、賢治はこの場所の記憶



馬の背渡り（ヘッタクレ）と、健次郎とのキノコ採りをした思い出を合せてこの作品を書いたと思われる

③ 二人の役人

【あらすじ】

9月のある日曜の朝、私と慶次郎は練兵場にキノコを採りに行った。

その日は「長官一行の出遊により立入禁止」の札が出ていたが、二人は無視して中に入った。

夢中になつてキノコを採っていると、二人の役人が近づいてきた。捕まると覚悟をしていたら、彼らは袋から栗を取り出して栗の木の周囲に撒き始めた。次に彼らは、二人に褒美をやるから採つたキノコを渡すように言つてきた。二人が渡すと、彼らは茅でキノコを串にして地面に刺し、生えているように見せかけた。彼らは長官とその家族が栗拾いやキノコ採りを楽しめるように準備をしていたのだつた。

二人は作業を手伝いながら笑つてしまつた。役人たちも笑つていた。

【解説】



工兵第八連隊門柱（盛岡市青山）作中の「練兵場」は観武ヶ原（盛岡市青山、みたち、月が丘、滝沢市滝沢に広がっていた原野）の旧陸軍練兵場を指します。二人で行つたキノコ採りの楽しい思い出

を、役人たちが長官をもてなすために苦心する様子をおもしろおかしく描くことで表現しています。 ※次回からは、賢治の代表作「銀河鉄道の夜」と、南昌山、藤原健次郎のかかわりについて紹介します。

※「宮沢賢治と矢巾町」は「矢巾町宮沢賢治を語る会」の松本隆会長に監修および写真、資料の提供をいただいています。